

平成13年8月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

スゲで編んだ草履

スゲは野や山に自生するカヤツリグサ科の植物で、世界に約2,000種、日本には約200種あり、そのうち東京都では約70～75種、青梅では約55種（青梅の自然Ⅱ）が記録されています。昔は、農家にとって貴重な繊維資源の一つでした。俳句でも「菅狩（スゲカリ）」が夏の季語になっています。「夏7月頃、生育した菅を刈り取る。菅刈る。菅干す」と歳時記に記されていて、いかのような句もあります。

菅刈って沼風広く渡りけり 稲畑汀子

菅刈りの菅笠といふものありぬ 小林草吾

中でも「カサスゲ（笠菅）」は、別名「ミノスゲ（蓑菅）」と呼ばれ、丈夫で長い葉を菅笠や蓑を作るのに利用したことからその名前がつけました。明治、大正時代までは栽培もしていた程でした。青梅市郷土博物館の収蔵品にも、スゲ製の笠や蓑があります。蓑笠は現在でも釣りの時などに使われていて、釣具店で鮎釣り用として売られています。

また、青梅の成木では草履作りに「カンスゲ（寒菅）」を使っていたという話を聞きました。その時は半信半疑でした。というのは、数あるスゲの中で、カンスゲは「冬も葉が枯れず、濃い緑色で、葉は硬く光沢があり、ふちは手が切れそうなほどざらつく」（「山に咲く花」山と溪谷社）とあり、葉の長さもカサスゲほど長くないので、利用しにくそうなスゲだからです。しかし確かに、カンスゲは「山地の谷沿いなどに生え、叢生して大株となる」（同上）ので、山地の上成木7丁目の川口繁一さん（88歳）にお話を伺い、実際に高土戸入り（タカトイリ）という沢で、カンスゲを刈って頂きました。たくさん生えているので、量は充分確保できそうです。刈る時期は、7月の土用の頃、刈る葉は新葉だけです。なるほど、春に出た新葉は黄緑色で、まだそれほど硬くなく、長さも利用できるほどにはなっていましたが、ふちはややざらついています。だからでしょうか、それを釜で湯が煮立ってから入れて茹で、その後一週間ほど干してから使うのだそうです。実際に茹でて干してみると、乾いた葉の長さは40センチメートル位あり、葉色は白っぽくなり、葉のふちはざらつかず、これなら手を切る心配もなく利用できそうです。昔はそれを編んで草履にしていました。スゲだけだと履き心地が硬いので古布をさいて、混ぜて編み込みました。特にかかと部分や鼻緒には多く布を混ぜ込んで履き心地を良くしました。カンスゲの他には、細くした竹の皮やとうもろこしの皮でも草履を編んだそうです。上成木は山地で稲藁が手に入りにくいので、このような植物を使ったのでしょう。

今でも、放棄された谷津田などでスゲの刈り跡を見かけることがあります。何に使っているのでしょうか。スゲの利用法をご存知の方がいらっしゃいましたら、どうぞご教示下さい。

（文責 三好 ゆき江）